

芹沢光治良の作品に現れた中山みき像を通して彼の宗教観をみる——ニューエイジ運動との接点——

黄 耀儀

1. はじめに

芹沢光治良にとって神や宗教の問題は生涯を貫くテーマである。芹沢の文学作品には、神や信仰を追求する主人公の姿、「神様」の登場などの描写が度々見られる。天理教に帰依した家庭で生まれた芹沢は、天理教との関わりをしばしば作品に記しており、その中では天理教教祖中山みき（1798年-1887年）の生涯を描いた文学作品は『教祖様』である。1950年に『教祖様』を執筆するまで主人公の宗教性などを扱う作品があるとはいえ、神と信仰の問題を真剣に語ってはこなかった。そして、芹沢の晩年の神シリーズ作品¹（1986年に始まる）は、芹沢自身が中山みきとの霊的な交流体験によって、神と人間に関することを詳述するものである。鈴木吉維は『教祖様』が晩年の神シリーズへつながる重要な作品であると指摘している²。『教祖様』、神シリーズ作品は、作者の宗教観を明確に表すものであり、多くの読者に改めて自身の信仰観を思考するような機会を与える宗教文学の作品でもあるといわれている。

『教祖様』と神シリーズの作品において、中山みきを描くにあたって芹沢は、教祖を人間として造形する態度を明確にしている。その姿勢には、1838年にみきが神の啓示を受けた時点（神がかり）からみきが神になったという天理教教団の主張と、決定的な相違がある。天理教教団の作製した『稿本天理教教祖伝』（1956年）においては、1838年の神がかり以後のみきは神性が強調され、人間性³は問われない。したがってすべての行動が神的存在として人々を救済する活動のさまざまな現れでしかなかったとされる。このような理解においてはみきの神がかり以後の人間としての心の成長は必要とされないのである⁴。そのため、天理教ではみきが神として崇拝されている。だが、神がかりの時点からのみきが既に神だと見られ、苦悩や希望などの人間的感情が伴わないという教義の解釈がロボット説だ（みきは自己判断の能力を失い、神に操られる人形に等しい）という批判もある⁵。

『教祖様』において芹沢は、みきが神意の受容をしてから、人間としての苦

悩を抱え神意と闘って自己の意識変容の達成をとげ、自身の信念体系の形成に至るまでの、彼女の内的世界について詳述している。現在、『教祖様』の作品に関する先行研究⁶の多くは、天理教信者である両親の信仰生涯に基づいて芹沢の執筆動機を論じたり、芹沢自身の神観、教団に対する態度を検討しているが、作品に現れたみきの内的世界、内的な経験に触れているものは少ない。そのため、筆者は芹沢がみきの内的世界、彼女の宗教家としての思想をどうとらえているのかに関心を持つようになった。ところで、弓山達也は芹沢の宗教観が天理教からの影響があり、そして彼の宗教観がニューエイジ運動にみられる世界観に親和力があると指摘した⁷。本稿では、中山みきの生涯を語った『教祖様』を主にして、神シリーズの作品をも含み、これらの作品に現れた中山みき像を通して芹沢の宗教観を検討する。また、彼の宗教観をニューエイジ運動と結びつけ、その接点の解明を試みる。

2. ニューエイジ運動との接点

ニューエイジ運動は 1960 年代後半から 70 年代にかけて、超自然的・精神的な思想をもって既存の文明や科学、政治体制などに批判を加え、それらから解放されると同時に、東洋思想や神秘主義などを積極的に採り入れ、真に自由で人間的な生き方を模索しようとする運動である。宗教文化的な側面ばかりでなく、ニューサイエンス、エコロジー、潜在能力開発、自然医学、ヒーリングなどへと領域が拡大されてゆく。ヒッピーやドラッグ文化が流行したのもこの時代である。日本にもニューエイジ運動関連の書籍が一般書店の「精神世界」というコーナーに置かれるようになった。それらは、東洋思想、神秘主義、ヨガ、呼吸法、占星術、輪廻転生、チャネリング、自己開発、環境保護など、「意識変容」をテーマとするものであった。

島薺進によれば、典型的なニューエイジ運動の信念では、人間個々人のうちに潜みつつ、個を超えて宇宙を包摂する存在につながるような「大いなる自己」(Higher Self) がもっとも重要な聖なるものの現われとなる⁸。「大いなる自己」とは自分のもっともスピリチュアルかつ知的な部分で、日常的な人格ないし自己である自我(エゴ)や、個人的無意識を越えたものといわれ、これとの接触から英知や導きを引き出すことができ、「超意識」「内なる神」「神性自己」などさまざまな呼び名がある⁹。そして、この「大いなる自己」を導出し補佐するものにはさまざまなものがあり、書物印刷物、音楽、メディアなどの情報機

器、教団人物、学者のほかに、指導霊（spirit guides）というものもある。ニューエイジ領域では、指導霊とは超越的存在で、人が生まれる前に選ばれるものであり、指導霊に触れることができればどんな場合にも彼らの指示を仰ぐことができ、人生の高次の目的に向かって歩めるという¹⁰。

また、ヒーラス（Paul Heelas）は、ニューエイジ運動に典型的に見られる、超自然的な存在との交流による自己霊性の喚起といった文化的諸実践を、既成社会や文化に抑圧された本来の自己の聖性を取り戻す探求行為であるにとらえている¹¹。なお、伊藤雅之は欧米のニューエイジ運動や日本の精神世界の領域を包摂した「スピリチュアリティ」（霊性）を、「おもに個々人の体験に焦点をおき、当事者が何らかの手の届かない不可知、不可視の存在（たとえば、大自然、宇宙、内なる神／自己意識、特別な人間など）と神秘的なつながりを得て、非日常的な体験をしたり、自己が高められるという感覚をもったりすること」と定義している¹²。自己が高められる感覚とは「聖なるものとのつながり」¹³を通して「気づき」（新しい生き方の発見、心の成長、自己の再認識など）が生起することであると、伊藤は言っている。

次にニューエイジ運動を教団宗教と比較してみよう。島菌によれば、一般に既成宗教、特に新宗教は教義や儀礼の体系をもち、教団組織をもち、特定の創始者を決定的な真理の啓示者として崇敬している。ニューエイジ運動の考え方のなかには、「自己変容」や「心の癒し」といった目的を目指し、そもそもそうした固定的な教団宗教のあり方が好ましくないという観念、複数の宗教概念を持つ傾向が含まれている¹⁴。このように、ニューエイジの特徴は一つの信仰や教団に囚われることなく、「聖なるものとのつながり」の行為によって、自己神性を覚醒して自らの心を見つめ、古い自己の限界を知り、新しい自分の発見という自己変容ができることであるととらえられているように考えられる。

3. 中山みきの「聖なるものとのつながり」

『教祖様』¹⁵は天理時報社の社長の依頼によって、1950年10月29日から1957年9月8日までの7年間、『天理時報』に338回に渡って連載された長編伝記小説である。本章では、『教祖様』におけるみきの仏教への帰依、神がかりなどの「聖なるものとのつながり」過程に焦点を当てて、神、神性、人間としての葛藤をみるため、「神がかり前後」「神への疑いと受容」に分けて検討する。ちなみに、本稿では神は「超自然的な存在」であり、神性は「人間社会の枠に囚わ

れた自己を越え、自由自在に神に向かって、自分の理想の生き方を追求できる、自分の心の中に秘めてある潜在能力」であり、人間性は「神性に対し、既成社会の価値観に基づく一般的人間感情の弱点、私欲などである」、という意味で使っている。

3.1 神がかり前後

中山みきは、1798年に大和国山辺郡三昧田村（現在の奈良県天理市三昧田町）の前川半七の家に生まれた。1810年に大和国山辺郡庄屋敷村（現在奈良県天理市）、豪農層である中山善兵衛に嫁ぎ、四人の子供を生み、1838年まで主婦の役を尽くした。芹沢は中山みきの結婚は「苦悩の多い結婚生活」であり、彼女は完璧な嫁として「自分をなくして、こころも身も粉にして働かなければならない」ととらえた（『教祖様』p.10）。苦悩に満ちた生活から脱出するため、仏教に帰依したみきであったが、あるできごとがきっかけで、仏教の信仰をやめることになった。それは夫の善兵衛が妾を持ったことである。衝撃を受けたみきは、中山家で完璧な嫁の役を果たすため、夫への怨念、妾への嫉妬の気持ちを抑えなければならなかった。みきは悲しい精神状態に陥って、仏教に対して「何故自分を救えないのか」という疑惑を持つようになった。みきは仏法以外に生活の苦を越えられる方法がきっと自分の中のどこかにあると思案しはじめていた。そして、1838年にみきは天啓といわれた神がかり事件に遭うようになった。

みきの神がかりを概説すると、長男善右衛門の足痛がきっかけである。医療手段で足痛が直らない善右衛門にとって、寄加持（憑祈祷）という呪術的行為が唯一の頼りうる治病手段であった。しかし市兵衛という修験者の主宰する寄加持の行為では、長男の足痛がなかなか全治しなかったため、1年に9回にも及んでいて莫大な費用がかかった。最終回の寄加持は、その日いつもの「加持台」（霊媒の一種）が不在であったので、みきが替わりをつとめることになり、中山家の屋敷で行なわれた。ところが、市兵衛が降神を願って後、みきの口を通して人々が聞いたものは、今まで耳にしたこともない神であった。「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。このたび、世界一れつをたすけるために天降った。みきを神のやしろに貰い受けたい」。みきの周りにいた人々は最初、この神の降臨に驚き、疑念をもった周囲の人々も、みきの神がかり状態がもとに戻らないため、最後にはやむなく、みきを神のやしろに捧げる

旨を伝えた。こうして神はようやく退いたのであった。芹沢は神がかり以来、体内の新しい存在と対応するみきの複雑な心境について詳しく描いた。

みきは神がかり以来、深夜よく体内の新しい存在＝神様の声を聞いた。その声の内容は「みき、人間全体の母となって、神のお思召しを現実生きて見せ、世界の人に神様の人間創造のおもむくを伝えて、人間世界を救ってはくれまいか」であった（前掲p.44）。このような内容は「全く聞きなれない声であり、聞いたこともない話である。一体、どういうことであろうか」（前掲p.44）。みきはその神様の話に不安かつ疑いを持っていた。それにもかかわらず、毎夜、神様との対話はみきにとって「神と婚姻するように幸福」であった（前掲p.48）。

しかし、みきが神との幸せな対話のことを夫の善兵衛に話すと、「その神様を目で見たのかね」と聞かれた。当時みきの反応について、芹沢は以下のように書いている。

急にみきも心が動揺して、人間をつくり、人間の親である神の存在を疑うのではないが、その神を見たことがないと、疑惑の雲に包まれたりした。そして、自分の魂をやわらかにつつんでいる御霊に、神のお姿を見せてもらいたいというような、無理な祈りをすることもあった。

「神の姿を見たければ、外へ出て天を仰げ」

そう聞えるような気がして、みきは闇夜に庭へでたことがある。冷い微風が竹藪の上にそよいで、空には星がきらめいていた。みきはいつまでも佇んで大空を仰いで、神の出現を待った。

「月も日も神の姿、風も神である」

そう聞えて、神は姿を現さなかった。みきはその言葉を胸にきざみつけるように受けて、色々考えたが、どう解すべきか、わからなかった・・・或る時には、

「鏡を見なさい。神があらわれるで——」と、みきに聞えたこともある。

みきは急いで鏡をのぞきこんだ。しかし、鏡のなかには、人生の苦労をきざみこんだ四十女の自分の顔がうつるばかりで、神様の姿は見えなかった。みきは見たことのない人の顔のように、自分の顔を眺めた。

「人間が神である」

そういう声が出たようで、みきははっとした。鏡の前に坐って、人間が神であるとはどういうことか、胸のなかにくりかえした。どういう意味で

あろうか。神がつくったものであるから、人間は神であるというのであろうか。自分以外の人間を、神とあがめてとおれと、いうのであろうか。

人間のように考えないで、神のように考えよう。そうみきははじめてさとしたような気がした。(前掲 pp.53-54)

以上はみきの自己の神の声を聞いた体験を語ったものである。この描写によって芹沢の示していることは以下のように考えられる。

この時の善兵衛の役は、神に向かっているみきを既成の秩序世界に取り戻そうとすることであった。なぜなら、みきの神は従来神と違って、聞いたことがないものであり、一般の人々はみきの神がかりを狐つきだと信じ、みきの神を認めないからである。また、みきは神がかり以来、終日蔵に入って神意を取り次ぎ、沈思をするため、家事にも育児にも手がつかないで完全に中山家の主婦の役を放棄した。このみきの変化を阻止するため、善兵衛はわざとみきに「その神様を目で見たのかね」と聞いて、神に対するみきの態度を攪乱させ、神を疑わせたのである。神がかり以来、神の提示した世界に憧れたみきであったが、他人の一言だけで、神との信頼関係が動揺してしまうことになった。みきの神への疑惑には既成の価値観にとどまって完全にそこから脱出できないことが、みてとれる。

みきの神に対する疑惑の描写は、次にみきが自分の中に秘めた神なるものを覚醒させるという場面につなげるために芹沢が用意したものである。目で見られない神を探す行為によって、みきは自己の神の声を聞くという能力に気づき、神と一体となろうと志した。「人間が神である」、「神のように考えよう」とさとしたみきは、善兵衛の一言だけで動揺したことで、人間が自分で自分の壁を作って、人間のうちにある神なるものや聖なるものに気づかなくなってしまったことを意識した。みきは神に近づこうとする、つまり神性の覚醒の描写は、ニューエイジ運動の文化的実践が、既成社会や文化に抑圧された本来の自己の聖性を取り戻す探求行為であるというヒーラスの指摘と親和力があると思われる。この段階の「聖なるものとのつながり」(神の存在の確認行為)の過程では、みきは人間社会の秩序から脱出しつつ、神への精進を続け、自己意識の変容へと進んでいくのである。

3.2 神への疑いと受容

自己の神性を覚醒しても、みきは現実の人間生活をする限りいつでも完全に人間性、つまり人間らしい感情（例えば、挫折感、難関から逃げようとする気持ち）を抑え切れるわけではなかった。その後、みきは貧民に家財を施せという神意を受けた。それ以来、豪農層であった中山家の家財、田畑の多くを放擲し、貧民に施し与えつづけたことによって中山家は没落し貧に落ちきった。このような指示の実行が「みき自身の再生が実現するのだ」（前掲 p.70）という神意をみきに意識させた。しかし、こうした神の意志のあり方は人々の了解しがたいところであった。それは家族の未来にとっても、みき自身の幸せにとっても何の意味ももたぬものと感じられたからである。ついには、親族につきあいの停止を通告された夫の善兵衛は中山家の崩壊に苦しみ、ある夜、みきの枕もとで白刃をつきつけようとした。芹沢は、善兵衛の行動を知って、池に身を投げようと試みるみきの内心の葛藤を次のように描いた。

みきは涙のこぼれる目でじっと夫を見るばかりだった・・・

人間世界を救うのだときおいたって、実は、他人を助けるどころか、わが家庭の一人をも助け得ない状態が、はっきり目に見えたろう・・・

みきはその瞬間、かつてのすなおな妻になるから、身のおきどころのないほど惨めになるのだった・・・

自分さえいなかったら親類や世間から非難も嘲笑もなく、夫にも子供にも心配や難儀をかけないですむ。そう、みきは大和の一人の妻の心（下線は筆者）になって、池の方へとぼとぼ一人歩いていた。

みきは両手をあわせてとびこもうと身構えた。

「早まるのやない。早まるのやないで——」

みきにはその声が御霊からだとすぐ分かった。思わず天を仰いだ。星がきらめいていた。親神の姿は見えなくても、みきには親神を全身で感ずることができた・・・

その瞬間、神のように考えて人間のように考えてはならないと、みきは激しく思うのだった・・・

みきは親神にわびた。涙がとめどなく頬にながれた。池のはたに立っていつまでも神に祈った。折によって御霊をきき、神に近づこうとするように祈りつづけた。（前掲 pp.85-86）

そして自宅に戻ったみきの心境は次のように書かれている。

みきはその時初めて、自分に夫も子供もないことに気づいたのではなかったろうか。神の子にうまれかわったみきには、あの夫や子供はすでになく、イエスのように、

「誰にても天にいます我が父の御意を行う者は、すなわちわが兄弟、わが母なり」といえるような新しい子供が必要になっていたのではなかろうか。……みきにとっては新しい家族をもとめて、一人も求め得られなかった孤独を、なげいていたのではなかったか。その孤独は死に等しい。(前掲 p.86)

以上の描写によって、芹沢の示すことは次のようであると考えられる。「大和の一人の妻の心」になったことは、みきが人類の母を自覚していた心から、すなわち心の中にある神なるものが消えて「すなおな妻」としての意識に戻ってしまったということである。みきの自殺の試みは、自らを人類の母とした自己の新しい信念に対する疑惑を生じ、そこから逃げようとする、また神への不信感でもあることを意味する。また、この自殺は人が難関を乗り越えられない時、最悪の選択肢をとる卑怯、懦弱な行為であり、みきがまだ人間的感情の弱点を持っていることを意味している。しかし、その一方、みきは自殺を試みたまさにその瞬間に神の声を聞くからこそ、神とのつながりがより強く感じられ、心内の神性がより一層大きくなったのである。そしてみきは、今までの家族から「新しい家族」を作るという新しい任務に目覚めるのである。自己信念の達成もより急速になされてきたのである。

みきが「自分に夫も子供もないこと」に気づいたことは、みきが実在の家族の絆を捨てるという意味である。また、「新しい家族をもとめる」とは、みきが人間すべての母の役を引き受け、すべての人々が優劣なく上下なく、みな神の子である新しい家族を作ることの意味している。施しによって貧窮になったことこそがみきの生活形態の変更の契機となったのである。そこには新しい社会生活の芽生えというようなものが感じられる。親族からも見捨てられていた一家の周囲に、新しいつきあいの範囲が生まれていることが察せられるのである。

この段階の「聖なるものとのつながり」において、みきの人間性¹⁶と体内の神意の奮戦を経て、みきは家の希望や倫理に基づく常識的な思考を解体させ、世

間と違った新しい秩序を求めることを志すようになった。なお、この描写はみきが困難に伴う挫折感、そこから逃げようとする気持ちといった人間らしいものを抑え、心の中の神性が強くなって、新しい秩序構築の聖性的行動を決意した、というみきの神意の内面化、自己変容の過程を語っている。

みきの自殺の試みは『稿本天理教教祖伝』にも記されている。しかし、上述(1. 初めに)のように、天理教では天啓以後のみきが完全に神の存在であると説いている。教団では神の存在であるみきの自殺の試みを、「ひながたの親」(＝人類の模範の親)として、わざと人間の弱さとその弱さを克服して心の成長に達したことを示す一つの手本としてとらえている。

すなわち、教団のみき像は神がかり以後、人間的感情の弱点が現れない、神のような完璧な存在である。それに対して、芹沢が描いたみきは、様々な苦悩、現実への屈服、神に対する疑心、自殺の試みなどの人間の弱さを抱えながら、それを克服して神へのつながり、自己信念の達成をより一層努力する。むしろこの描き方こそ、読者達がみきの偉大さを感じられるのではないかと思う。

4. 「心なおし」の重視と教団への批判

4.1 「心なおし」の重視

みきがたくさんの信者達を獲得した一方、明治8年、みきは多数の人を集めるという理由で初めて投獄され、以後、死の前年までしばしば投獄された。みきの投獄や布教の妨害を防ぐため、信者達は教会公認運動へと駆り立てられていった。しかし、善右衛門や側近達の教会公認や教団成立の行為はみきの信念と違っていった。こうしてみきは、ひたすら教団の公認を取りつけようとする側近達との心の乖離を深めていく。

みきが教会公認を認めないことが教団の『稿本天理教教祖伝』にも記されている。芹沢はみきが、善右衛門と側近達の教会公認の行為に反対する理由として、人間の心の問題に焦点を当てる。それに対して、教団は心の問題にも言及するが、公認自体が官憲からの迫害を受けるみきを保護するため、また順調な布教のため、世間の権力者との妥協がやむを得ないことであると強調する¹⁷。心の問題について、芹沢は次のように考えている。

善右衛門と側近達は、「みきが常に神の秩序に生きていた」と違って、いつも「人間の秩序にとどまってしまう」のであった(前掲 p.199)。人間の秩序にとどまることは彼らが人間社会の価値観、つまり教団成立という権力を期待す

ることなのである。芹沢は「神のように考えることで、人間心をすてることができたのであろうか」、「神を知るとは、神と一体になることで、その人の意（こころ）が神の意となることである」（前掲 p.109）など、それと類似した言葉を頻繁に書く。「神のように考える」、「人の意が神の意となる」とは、「心の建てかえをする」という天理教の言葉の「心なおし」の意味である。「人間心をすてることができた」とは、人間社会の価値観（例えば、当時の家父長的な支配概念、階級制度、権力主義の追求などの人間の私欲）を変え、聖なるものに向かって人格的精神的向上ができるという意味であると考えられる。この人間心は本稿の定義した人間性のように、いわば人間社会の価値観に囚われた私欲であり、人間の私欲こそ、神とのつながり、自己神性の覚醒の支障となるものでもある。だから、「心の建てかえ」をすれば、ようやく本当の真理を理解でき、自己の意識変容にもつながると考えているのである。我執を離れ、過剰なまでの所有欲を捨て去れば、心に豊かな思いが生まれる。そして、神にも無欲な心で近づけるのではないか。また、「心なおし」に関して次の描写がある。「みきの話を心でうけて神を知ったら、その瞬間に、その人々は世の中がころっと変わっている」、「世の中が変わったと感ずるほど、心の建てかえをするのが、信仰である」（前掲 p.178）。芹沢にとって「心の建てかえをする」という「心なおし」こそが、みきの教えの主旨なのである。

芹沢のいう「心なおし」をニューエイジ運動の特徴、つまり、個人の意識変容による世界の変貌というニューエイジ運動の考え方と比べてみよう。なぜなら、芹沢の理解したみきの「心なおし」に非常に近いと思われるからである。ニューエイジ運動は一人ひとりの自己神性の覚醒による意識変容によって、文化の総体を、そして社会を変革し、人類史を完全な成熟に向かわせようとする潮流と言い換えることができる。例えば、1960年代から70年代半ばまで、ニューエイジ運動の担い手は「意識が変わらなければ世界は変わらない」というスローガンを提唱し、社会運動への積極的な参加と同時に、身近な生活世界の問い直しを通じて自己意識変革への働きかけも実践した¹⁸。

4.2 教団への批判

芹沢は中山みきの生涯や教えに関心を持ったが、天理教教団に対しては常に冷厳な目で観察している。芹沢にとって、教団とは「神の教にも、人間の信仰にも、さして関係がない」（前掲 p.160）のであったが、教団ができると「信仰

がそれに結び付けられて、神の教を曲げることが、しばしばおきる」(前掲 p.160)のである。芹沢にとって教団は世俗的権威と同様なものにすぎない。『教祖様』において、みきも当然、その「宗教の墮落」を知っているが、ただ黙って側近者達の権力主義に悲嘆して目をつぶっていると描かれている。そんな側近たちの行動に関わりなく、その晩年まで、みきはただ淡々と神の道を説き続けたのであった。

また、善本社版の『教祖様』の「再版のいきさつ」において、芹沢はみきの神である親神とみきの思想が天理教の独占したものではないと述べている。芹沢が天理教教団を批判する原因の一つは教団が一般人が神やみきとの霊的交流を認めないことなのであると考えられる。教団と関係なく、神との交流による自己変容の達成は芹沢に非常に重視されるからである。それに関する内容は芹沢の晩年の神シリーズ作品には詳しく書かれてある。

まず、神について、『神の微笑』(1986年)では、「神はイエスにも天降ったばかりではない。その以前に、釈迦にも天降ったぞ。キリスト教の教えも、釈迦の教えも、偉大な同一の親神の教えだ」(『神の微笑』 p.37)という描写がある。芹沢にとって、神とは宇宙や大自然を動かす唯一の偉大な力であり、釈迦、イエス、中山みきがその神の使者である。

そして、中山みきの位置づけに関しては、『人間の生命—永遠なるいのち』(1991年)では、芹沢は天理教の教祖中山みきは生まれながらに神であったわけではなく、ある日親神が下り、親神との交流によって、人類の母として新しい秩序の構築という使命を心に刻んで、修行の果てに神の働きをするようになったと述べている。また、みき以外の人間も、彼女のように神への精進をして、自然にそれぞれの使命を自覚し、修行を積むことでそれを成就していくことが、人間の生きる道であると示唆しているのである。すべての人間の持つ使命とはどんな使命なのかについて、『神の計画』(1988年)で芹沢は、中山みきの霊との交流体験を記載し、みきの言葉を次のように書いた。誰でも生まれながら、「めいめい神の使命をもって、生れたの」である。「おのおの、どんな使命を持ってるか知るには、先ず、好きなものを選べばいいのや。例えば難しい科学が好きで、すぐ役立たないような専門のことでも、研究しつづけて、満足しているお人の言動を見なはれ。神さんを安心させられるから」である。「何の信仰はなくても、毎日喜んで好きな研究をつづけている」うちに、人は立派に変わって、「ちゃんと神さんの使者のお役を果たしている」のである(『神の計画』p.216)。

芹沢自身も、若い頃、目で見られない力と交流によって、作家の使命を自覚して作家の道を歩むことを決意して、その時の神秘体験が偉大な親神の働きであると信じると述べている。

『神の慈愛』(1987年)において、天理教教団に対する批判が次のように述べられている。天理教教団は教祖中山みきの死後、教祖の言葉を取り次いだ人が本席と呼ばれる飯降伊蔵のみである。飯降の死後、「存命の教祖は教祖殿に納まり、教祖の言葉を取り次ぐ者も天啓者も現れない」(『神の慈愛』p.170)ため、天理教教団の指導者である真柱しんばしらは神の代理者となった。そして、真柱が中心となり彼に都合のいいものだけで教理を創って、教会に公布した。

以上の内容によって、芹沢は人々がみな神の使者になれるのであり、神との交流によってそれぞれの使命を自覚して、適切な生き道を見つけよと述べている。しかし、芹沢のように、親神、中山みきの霊と交流することによって感得した神意を公にする(書籍に記することや人々に伝えること)ような人々は、天理教に異端視されている。実際に天理教の歴史上において、天理教教団における神との直接的接触と神意感得を認めないことが、天理教の分派教団と見なされている「ほんみち」・「ほんぶしん」・「おうかんみち」などの分派教団を生じた主要な原因であると考えられている¹⁹。

「神とのつながりによる自己変容」という行動を重視する芹沢にとって、神との直接的接触と神意感得を容認しないことは天理教教団の権威の具現である。つまり、教団の存在は逆に我々の「聖なるものとのつながり」の支障となり、真の信仰とは関係ない。人々がみな教団を通さなくても親神、中山みきの霊と直接に交流ができ、その交流から感じた神意によって自分にふさわしい生き道を見つけることができると、芹沢は主張しているのである。そして、作品を通して、中山みきの生涯は人間に示す手本であり、みきの思想は神がみきを通して人間に教える真理であるが、この真理(みきの思想)が教団と関係ないと読者達に示唆している。この示唆と上述の芹沢の天理教教団に対する批判態度からみれば、芹沢は一つの宗教の枠に囚われない立場を取っていると考えられるのである。

5. 結論

以上、「聖なるものとのつながり」、「自己の神性の覚醒」、「自己変容」、「一つの宗教に囚われない立場」というニューエイジ運動の特徴と、芹沢光治良の中

山みき像の検討を通して彼の宗教観が窺えるのである。芹沢は『教祖様』において、みきを人間として、彼女の「聖なるものとのつながり」の生涯を描いている。結婚後の苦悩に満ちた生活をひたすら仏教に託したみきは、仏教でも自分を救えないと気付き、自己の霊性探求に関心を持つようになった。長男の足痛のきっかけで、神がみきの身体に降りたが、それ以後の生活はみきと彼女の家族にとって決して幸福な生活とは言えない。神意の受容まで、みきは世間からの圧力に妥協し、屈服してしまった際、神に対する疑惑、自殺の試み、いわゆる神性に対して彼女の人間としての弱点（人間性）が現れた時もあるほど、苦悩、困難の満ちた生活を送っていた。みきは指導霊の存在のような体内の神とつながることによって、既成社会の価値観に抑圧された自己の神性（大いなるもの）が覚醒された。そして、信徒衆の出現、教えの伝播、共同的救済活動の信仰など、自己の理想世界に向かう新しい生活の開始は、旧社会の生活からの脱却を期待するみきに新しい希望、勇気を与えた。

人間的感情の弱点が伴わず、神のような完璧な存在という教団の教祖像に対して、芹沢が描いたみきは、神への精進の過程において、様々な挫折に遭う際に現れた人間の弱さを抱えながら、それを克服して自己信念の達成を努力する教祖像である。このみき像こそが、教団より読者達の心を引くのである。

また、芹沢の教団批判の姿勢について、『教祖様』と神シリーズの作品によれば、〈みきは人間のもつ神性について説き続けていたのに、天理教教団は教祖一人を神として崇め、人間の持つ神性を否定してしまった。組織をつくり教えを守ろうとしたときに、宗教はただ形式に墮してしまふ。それはしばしば教祖の教えを歪める。天理教教団は親神と中山みきを独占する。〉という芹沢のメッセージが読みとれるのである。天理教教団が一般人が神やみきとの霊的交流を認めないことに対して、芹沢は皆が教団を通さずに神やみきとの霊的交流など、いわゆる「聖なるものとのつながり」によって自分にふさわしい生き道を見つけ、新しい自分の発見という自己変容ができると、芹沢は強調している。また、真理、真の信仰が必ずしも一つの宗教や教団にあるのではなく、我々が既成宗教や教団組織にとどまらないで、自分の力で神に向かって真理をもとめるべきなのだと、作者はこのように読者達に示したいのである。

なお、芹沢にとってもっとも重要なみきの教えは、人間の心の埃を払って自己意識の変容や自己神性の重視という「心なおし」である。『教祖様』の中で、芹沢が「人々が心の建て替えをする瞬間、世の中がころっと変わる」という言

葉をみきの口を通して語らせたのは、人々の「心なおし」の具現と神の働きということである。『教祖様』において、みきの生きた幕末から開国、明治維新に至る歴史の大きな転換は人々の「心なおし」によるものであり、この心の転換による時代の変換ということも神の意思であると述べられている。神シリーズ作品の一つである『神の慈愛』（1987年）において、芹沢は親神が人類の救済のために1987年に地上に再び降り、それによって東西陣営のリーダーに「心なおし」が計られ、冷戦が終結したのだと述べている。芹沢が個々人の「心なおし」を人類史の転換と直結して語る姿勢は、ニューエイジ運動が、一人ひとりの自己神性の覚醒による意識変容によって社会文化の変革、時代の転換に良き影響をあたえることを強調する姿勢と通じるといえよう。

芹沢の中山みき像は、みきが「聖なるものとのつながり」において、人間であるゆえに苦悩を抱え、神への精進を続けたため、人間社会の枠組みを超えて、自己変容を達成し、一人の宗教家としてその思想を達成した女性というものである。そして、作者は作品の中の彼女の説法を通して、神の世界が人間の魂のレベルによって、見えるものや示されるものが異なり、胸に響いてくるものも違うため、私達が人間の既成の価値観や宗教団体にとどまらない心で、誠心に神へ向かって、自分に適切な生き道を歩むべきであると読者に示している。こうした信念は、芹沢がとらえたみきの教えであり、ニューエイジ運動にみられる、固定的な教団ではなく「聖なるものとのつながり」体験による自分変容を重視する特徴と共通していると考えられるのである。

注

- 1 神シリーズの作品は8つあり、年代順にあげると次の通り（いずれも新潮社刊）。『神の微笑』1986年、『神の慈愛』1987年、『神の計画』1988年、『人間の幸福』1989年、『人間の意志』1990年、『人間の生命』1991年、『大自然の夢』1992年、『天の調べ』1993年
- 2 鈴木吉維『芹沢光治良研究』、おうふう、2007年、p. 18
- 3 本稿での人間性は、神性に対して、既成社会の価値観に基づく一般的人間感情の弱点（例えば苦悩、軟弱、嫉妬など）、私欲（権力欲、所有欲）を意味している。
- 4 『稿本天理教教祖伝』の表現は次のとおりである。「一列人間を救けたいとの親心から、自ら歩んで救かる道のひながたを示し、物を施して執着を去れば、心に明るさが生れ、心に明るさが生れると、自ら陽気ぐらしへの道が開ける、と教えられた」（p. 23）。この場合「ひながた」とは神が人間の踏むべき道を演じて見せるということであって、そこに苦悩や希望などの人間的感情（人間心）は伴わな

いとされる。(『稿本天理教教祖伝』、天理教教会本部編、1956年)

- 5 青地晨『天理教一百三十年目の信仰革命』、弘文堂新社、1968年、pp. 83-89
- 6 芹沢の『教祖様』を取り扱う研究には以下のものがある。

柳田知常「「教祖様」(芹沢光治良)」、『作家と宗教意識』、緑地社、1971年12月

榎本隆司『『教祖様』』、『国文学 解釈と鑑賞』第62巻9号、至文堂、1997年9月

鈴木春雄「『教祖様』一神と人間の間に」、『国文学 解釈と鑑賞』第68巻3号、至文堂、2003年3月
- 7 弓山達也『天啓のゆくえー宗教が分派するとき』、日本地域社会研究所、2005年
- 8 島藺進『精神世界のゆくえー現代世界と新霊性運動』、東京堂出版社、1996年、p. 28
- 9 前掲島藺進『精神世界のゆくえー現代世界と新霊性運動』p. 85-86
- 10 前掲島藺進『精神世界のゆくえー現代世界と新霊性運動』、p. 86
- 11 Heelas, P. *The New Age Movement*, Blackwell, 1996年
- 12 伊藤雅之『現代社会とスピリチュアリティ』、溪水社、2003年
- 13 自己がつながる対象としては、自己の内面(内的宇宙、本当の自分)、他者(教祖、恩師、恋人など)、家族(親、先祖、子供)、共同体(地縁、血縁、社縁、信仰に基づくもの)、国家、世界、地球、自然、宇宙、神などが措定される。また、聖なるものとのつながり行動には現在、瞑想、ヨーガ、気功などいろいろな手段がある。
- 14 島藺進『精神世界のゆくえー現代世界と新霊性運動』東京堂出版社、1996年 pp.52-53
- 15 『教祖様』については、次の四冊が刊行されている。内容が同じであるが、出版年・出版社により題名が異なっている。

『この母を見よ』ー天理教教祖中山みきの生涯ー 東和社 昭和27年4月

『教祖様』、角川書店、昭和34年12月

『教祖様ーふしぎな^{おんな}婦の一生ー』、善本社、昭和53年10月

『芹沢光治良文学館5』「教祖様」、新潮社、平成8年6月

本稿が使っている『教祖様』資料は善本社が刊行したものである。
- 16 注3参照のこと
- 17 前掲『稿本天理教教祖伝』pp.317ー319
- 18 伊藤雅之「スピリチュアリティ研究の射程と応用可能性ー生老病死におけるスピリチュアル体験に着目してー」『年報 社会科学基礎論研究 第4号』、社会科学基礎研究会、2005年、参照。
- 19 「ほんみち」・「ほんぶしん」・「おうかんみち」などの宗教団体が天理教から分立した団体である。これについては、弓山達也は『天啓のゆくえー宗教が分派するとき』において、中山みきや飯降伊蔵の死後、親神の意思を伝える天啓者がいなくなったことに起因していると分析している。特に、飯降の死亡後の大正から昭和初期にかけて多く誕生している。